

新設四年制大学における学生生活の充実度とキャリア発達

およびメンタルヘルスとの関連 (2)

高澤 健司⁽¹⁾・播磨 俊子⁽¹⁾

Study on relation of student well-being with career development and mental health in brand-new University (2)

TAKASAWA Kenji⁽¹⁾ and HARIMA Toshiko⁽¹⁾

This questionnaire study investigated well-being among sophomores at a brand-new university. There were both positively influenced and negatively influenced group of students. The positively influenced group of students was 21% and the negatively group was 38%. Each group was analyzed in terms of relation between the influence and career exploration, ego identity, subjective adjustment and daily life skill with Analysis of Variable (ANOVA). The results showed that positive image sophomores had high score at self exploration, existence of task and purpose, feelings of acceptance and trust, self identity, social identity, readership, information summation and positive thinking. And they were compared with freshmen by t-test. The sophomores had high score at environment exploration, sense of sameness and continuity, identity for others, self esteem. It is showed that establishment of task is important for students in the first year at university.

Keywords : brand-new university, sophomores, campus life, career development, mental health

問題と目的

高澤・播磨(2013)では新設大学における創設1年目の大学生を対象として、上級生というモデルがない状況における大学生の学業や大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連について検討した。その結果、新設大学であることが大学の充実度にプラスであると考えた学生とマイナスと考える学生両方がおり、マイナスと考えることにも積極的な意味があることが示唆された。それらを踏まえ、プラスと考える学生にはその充実を支えるサポートを、マイナスと考える学生には自己探索を支援することが求められることが示された。

大学2年生は就職活動といった進路に向けての直接的な行動を起こすことは少ないものの、専門科目の授業も多くなることから、自身の進路探索を行い始める時期と考えら

れる。浦上(1996)や安達(2001)では、女子短大生によるデータではあるが、1年生から2年生にかけて自己効力感が高まり、職業未決定が低下することが示されており、自身の進路と学生生活の充実が結びつくことが考えられる。こうした指摘の中で、大学2年におけるキャリア探索が先輩というモデルがない中でどのようにされているかを検討する必要がある。また、2期生が入学し、2年生にして初めて学内に学年の上下関係ができることによる意識や行動の変化を検討することも、今後の学生支援において重要だと考えられる。

そこで、本研究では新設大学における創設1年目の入学生(1期生)を対象として、縦の人間関係を取り結ぶ対象であり、学生生活上のモデルや情報源ともなる上級生というモデルがない状況における大学生の学業や大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

意識や行動の発達との関連について検討する。さらに、1期生と2期生の比較から、上級生がいない状況についての特徴を検討する。

方法

1. 調査協力者：中国地方の新設四年制大学に所属する1期生にあたる2年生（2011年度生）229名に対して調査を行い（回収率100%）、うち回答不備等による無効回答を除く217名（男84名、女133名）を分析対象とした（有効回答率94.8%）。平均年齢は19.8歳（標準偏差0.78）であった。あわせて2期生である1年生（2012年度生）にも同様に調査を行った。こちらは対象者が226名（回収率100%）、うち回答不備等による無効回答を除く212名（男76名、女136名を分析対象とした。平均年齢は18.8歳（標準偏差0.56）であった。
2. 実施時期：2012年12月で、授業時間に調査用紙を配布し、回収した。
3. 調査内容
 - 1) 新設大学であることへの意識に関する項目
 - ①性別、年齢、居住形態、出身地域、②大学選択理由、③新設大学であることの大学選択への影響、④新設大学であることの現在の学生生活への影響、⑤新設大学であることの今後の進路への影響を尋ねる項目。
 - 2) キャリア探索尺度（安達, 2008）（5件法）、
 キャリアに関する環境への探索行動である「環境探索因子」と、キャリアに関する自分への探索行動である「自己探索因子」の2因子構成。
 - 3) 多次元自我同一性尺度（谷, 2001）（7件法）、
 自己の不変性および時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・連続性」、自己意識の明確さの感覚である「対自的同一性」、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致している感覚である「対他的同一性」、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の4因子構成。
 - 4) 学校への適応感尺度（大久保, 2005）（5件法）、
 周囲に溶け込み、なじめていることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さである「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感である「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚である「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感である「劣等感の無さ」の4因子構成。
 - 5) 日常生活スキル尺度（大学生版）（島本・石井, 2006）（4件法）

友人たちと親密な関係を維持するスキルである「親和性」、自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていかうとするスキルである「リーダーシップ」、時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキルである「計画性」、相手の気持ちへ感情移入するスキルである「感受性」、情報を秩序立てて再構成するスキルである「情報要約力」、現在のありのままの自分を肯定的にとらえるスキルである「自尊心」、困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキルである「前向きな思考」、相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである「対人マナー」の8因子構成。

各尺度の下位因子の平均点を算出し個人の得点とした。

結果

1. 1期生（2011年度生）2年時の結果

1) 大学生生活の充実度への影響

新設大学であることが大学生生活の充実度に影響しているかについて「プラス」と考えているグループ（以下、影響プラス）が45名（21%）、「影響なし」と考えているグループが89名（41%）、「マイナス」と考えているグループ（以下、影響マイナス）が83名（38%）であり（図1）、高澤・播磨（2013）の1年時の結果（影響プラス47名（25%）、影響なし85名（44%）、影響マイナス58名（30%））と比較すると、影響プラスが減少し、影響マイナスが増加した。

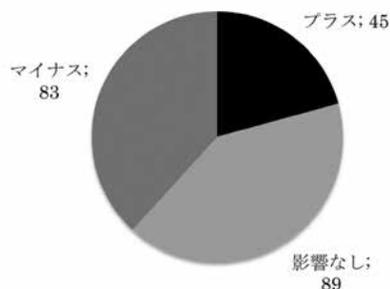


図1 新設大学であることが充実度に影響しているか

- 2) 大学生生活の充実度に及ぼす影響とキャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルとの関連
 次に新設大学であることが大学生生活の充実度に及ぼす影響を独立変数として、キャリア探索やアイデンティティ、適応感、日常生活スキルの各尺度との関連を高澤・播磨（2013）と同様に一元配置分散分析で検討した。

(1) 充実度に及ばず影響とキャリア探索

キャリア探索尺度との関連では、自己探索因子において影響マイナスよりも影響プラスの得点が有意に高かった ($F(2,214) = 5.01, p < .01$) (表1)。新設大学であることが大学生生活の充実度にプラスの影響と考えるグループの方が自己探索的傾向にあることが示された。その一方で、環境探索因子においては有意差が見られなかった。

表1 大学生生活の充実度別キャリア探索尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
環境探索	3.03(0.67)	2.80(0.74)	3.01(0.61)	ns
自己探索	3.71(0.72)	3.27(0.80)	3.38(0.74)	** プラス>マイナス

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(2) 充実度に及ばず影響とアイデンティティ

アイデンティティとの関連では、斉一性・連続性因子において、影響なしの方が影響マイナスの得点よりも有意に高く ($F(2,214) = 4.55, p < .05$)、対自的同一性因子では影響プラスが影響なしや影響マイナスよりも得点が有意に高く ($F(2,214) = 7.68, p < .01$)、心理社会的同一性因子では、影響プラスの方が影響なしや影響マイナスの得点よりも有意に高かった ($F(2,214) = 8.97, p < .001$) (表2)。新設大学であることが充実度にマイナスに影響と考えるグループの方がアイデンティティの感覚が低いことが示された。

対他的同一性因子においては有意差が見られなかった。

表2 大学生生活の充実度別多次元的自我同一性尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
斉一性連続性	5.07(1.35)	5.12(1.11)	4.59(1.25)	* なし>マイナス
対自的同一性	4.45(1.14)	3.93(1.07)	3.69(0.98)	** プラス>なし, マイナス
対他的同一性	4.14(0.84)	4.37(0.84)	4.09(0.77)	ns
心理社会的	4.57(1.06)	4.12(0.87)	3.82(0.99)	*** プラス>なし, マイナス

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(3) 充実度に及ばず影響と適応感

適応感との関連では、課題・目的の存在因子において影響プラスの方が影響なしや影響マイナスの得点よりも高く ($F(2,214) = 10.59, p < .001$)、また被信頼・受容感因子において、影響プラスの方が影響なしと考えるグループの得点よりも有意に高かった ($F(2,214) = 5.80, p < .01$) (表3)。

新設大学であることが充実度にプラスの影響と考えるグループに大学生活での課題・目的をみつけ、受容されている感覚が高いことが引き続き示された。

居心地の良さ因子、劣等感の無さ因子では有意差が見られなかった。

表3 大学生生活の充実度別適応感尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
居心地の良さ	3.83(0.60)	3.67(0.62)	3.58(0.76)	ns
課題・目的の存在	3.92(0.55)	3.46(0.69)	3.38(0.69)	*** プラス>なし, マイナス
被信頼受容感	3.26(0.76)	2.81(0.74)	2.84(0.81)	** プラス>なし
劣等感の無さ	3.26(0.73)	3.23(0.68)	3.01(0.70)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(4) 充実度に及ばず影響と日常生活スキル

日常生活スキルとの関連では、リーダーシップ因子において、影響プラスの得点が影響なしや影響マイナスよりも有意に高かった ($F(2,214) = 7.43, p < .01$)。また、情報要約力因子では、影響プラスの得点が影響マイナスの得点よりも有意に高かった ($F(2,214) = 3.37, p < .05$)。そして、前向き思考因子では、影響プラスの得点が、影響マイナスの得点よりも有意に高かった ($F(2,214) = 4.99, p < .05$) (表4)。

リーダーシップ因子においては、新設大学であることが充実度に影響プラスと考えるグループの得点が影響なしや影響マイナスのグループよりも高いことが示された。また、情報要約力因子と前向き思考因子で、新設大学であることが充実度にプラスの影響があると考えるグループは、マイナスの影響があると考えているグループより得点が高いことが示された。

親和性因子、計画性因子、感受性因子、自尊心因子、対人マナー因子においては有意差が見られなかった。

表4 大学生生活の充実度別日常生活スキル尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	
親和性	2.87(0.66)	2.85(0.64)	2.85(0.72)	ns
リーダーシップ	2.62(0.74)	2.34(0.60)	2.17(0.60)	** プラス>なし, マイナス
計画性	2.41(0.74)	2.28(0.68)	2.29(0.61)	ns
感受性	2.96(0.57)	2.72(0.61)	2.80(0.52)	ns
情報要約力	2.61(0.62)	2.37(0.53)	2.34(0.62)	* プラス>マイナス
自尊心	2.52(0.73)	2.42(0.53)	2.33(0.59)	ns
前向き思考	2.77(0.83)	2.61(0.64)	2.40(0.58)	** プラス>マイナス
対人マナー	3.24(0.58)	3.08(0.46)	3.04(0.55)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

2. 1期生(2011年度生) 2年時と2期生(2012年度生)

1年時の比較

1) 大学生生活の充実度への影響の比較

大学生生活への充実度の分布を比較したところ、影響プラスが1期生の方が多く、影響なしが2期生の方が多いことが示された(表5)。

表5 新設大学であることが充実度に影響しているか

	プラス	影響なし	マイナス	合計
2011年度生	45 (20.7%)	89 (41.0%)	83 (38.2%)	217
2012年度生	32 (15.1%)	97 (45.8%)	83 (39.2%)	212

2) キャリア探索, アイデンティティ, 適応感, 日常生活スキルの各尺度得点の入学年度間比較

1期生と2期生間のキャリア探索やアイデンティティ, 適応感, 日常生活スキルの各尺度の比較をするためにt検定で検討した。

(1) 入学年度とキャリア探索

キャリア探索では, 環境探索因子において1期生の方が2期生よりも有意に得点が高いことが示された ($t(428) = 2.70, p < .01$) (表6)。

自己探索因子では有意差が見られなかった。

表6 入学年度別キャリア探索尺度の平均値

	2011年度生	2012年度生	
環境探索	2.93 (0.68)	2.74 (0.77)	**
自己探索	3.40 (0.78)	3.39 (0.83)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(2) 入学年度とアイデンティティ

アイデンティティでは, 自己斉一性・連続性因子 ($t(428) = 2.95, p < .01$) と対他的同一性因子 ($t(428) = 2.36, p < .05$) において, 1期生の方が2期生よりも得点が高いことが示された (表7)。

対自的同一性因子と心理社会的同一性因子では有意差が見られなかった。

表7 入学年度別多次元的自我同一性尺度の平均値

	2011年度生	2012年度生	
斉一性連続性	4.91(1.24)	4.54(1.34)	**
対自的	3.95(1.09)	3.92(1.13)	ns
対他的	4.22(0.82)	4.03(0.83)	*
心理社会的	4.10(0.99)	3.94(1.00)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(3) 入学年度と適応感

適応感においては, いずれの因子においても1期生と2期生の間に有意差は見られなかった (表8)。

表8 入学年度別適応感尺度の平均値

	2011年度生	2012年度生	
居心地の良さ	3.52(0.69)	3.54(0.76)	ns
課題目的の存在	3.52(0.69)	3.54(0.76)	ns
被信頼受容感	2.91(0.79)	2.86(0.78)	ns
劣等感の無さ	3.18(0.70)	3.13(0.71)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

(4) 入学年度と日常生活スキル

日常生活スキルでは, 自尊心因子において1期生の方が2期生よりも有意に得点が高いことが示された ($t(428) = 2.35, p < .05$) (表9)。

親和性因子, リーダーシップ因子, 計画性因子, 感受性因子, 情報要約力因子, 前向き思考因子, 対人マナー因子においては有意差が見られなかった。

表9 入学年度別日常生活スキル尺度の平均値

	2011年度生	2012年度生	
親和性	2.31 (0.67)	2.33 (0.65)	ns
リーダーシップ	2.34 (0.65)	2.28 (0.63)	ns
計画性	2.31 (0.67)	2.33 (0.65)	ns
感受性	2.80 (0.57)	2.91 (0.60)	ns
情報要約力	2.41 (0.59)	2.26 (0.64)	ns
自尊心	2.41 (0.60)	2.26 (0.64)	*
前向き思考	2.56 (0.68)	2.49 (0.66)	ns
対人マナー	3.10 (0.52)	3.06 (0.54)	ns

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ns: not significant

考察

新設大学であることがもつ学生に対する影響を, 大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と, キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討するため, 大学新設初年度入学生 (1期生) を対象に, 1期生1年時の調査 (高澤・播磨 2013) に引き続き, 2年時について調査した。調査内容は新設大学であることへの意識に関する質問項目, キャリア探索尺度, 多次元自我同一性尺度, 青年用適応感尺度, 日常生活スキル尺度で構成されている。また同様の調査内容で, 2期生1年時の調査もおこなった。

ここでは高澤・播磨 (2013) と同様に, 対象学生を, 新設大学であることの学生生活の充実度への影響の違いによって3グループ (影響プラス, 影響なし, 影響マイナス) に分け, 各グループ間で得点差が明らかな尺度の構成因子に注目しその意味するところを考察する。

1. 1期生の2年時における、新設大学であることが学生生活の充実感にもたらす影響と各尺度との関連について各グループ間での有意な得点差は、「多次元的自我同一性尺度」(表1)の自己斉一性・連続性因子で影響なしと影響マイナスの間の差(>影響マイナス)が見られた以外は、全て影響プラスのグループが他のグループより高い得点を示す形で表れている。すなわち「キャリア探索尺度」(表2)での自己探索因子(>影響マイナス)、「多次元的自我同一性尺度」での対自的同一性因子と心理社会的同一性因子(>影響なし, 影響マイナス)、「適応感尺度」(表3)での課題目的的存在因子(>影響なし, 影響マイナス)と被信頼・受容感因子(>影響なし)、「日常生活スキル尺度」(表4)でのリーダーシップ(>影響なし, 影響マイナス)、情報要約力(>影響マイナス)、前向き思考(>影響マイナス)である。

「キャリア探索尺度」の自己探索因子は、自分の現状や将来についての省察を行う項目で構成されている。同じく「多次元的自我同一性尺度」の対自的同一性因子も、現時点における自己探索の方向が定まっていることを示す因子であり、心理社会的同一性因子は社会における自分の位置づけが確立していることを示す因子と言える。

これらのことから、影響プラスのグループは、先輩というモデルがない状況の中で、今の自分や将来について安定して内省でき、今後のあり方についても社会的な現実を踏まえて探索的に考えていくことができていることが示唆された。また「適応感尺度」の課題・目的的存在因子と被信頼・受容感因子の得点の高さからは、新設大学での学生生活を自分で目的設定し自ら切り開いていけるものにとらえていける可能性をもつとともに、大学に受け入れられているという感覚をもつことができる様子がうかがえる。

さらに「日常生活スキル尺度」のリーダーシップ因子、情報要約力因子、前向き思考因子の得点の高さから、対人能力や情報操作の力、前向きな発想が、学生生活を切り開き自分の現状や将来を探索していくことを支える力になっていることが推測される。

一方、影響マイナスのグループでは、現状の把握や自己あるいは将来への探索の力は弱く「日常生活スキル尺度」におけるリーダーシップや前向きな思考の得点も低いなど、自己やキャリアの探索に積極的な傾向は薄い。しかし1年生時の結果(高澤・播磨2013)同様、「適応感尺度」における居心地の悪さ因子や劣等感のなさ因子には、他のグループとの間に差はなく、このグループが特に新設大学での学生生活に不適応感が強いというわけではないと推測

される。そうした点を考えると、影響マイナスのグループに対しては、主体性や積極性が刺激されるような学生生活や進路のモデルを提示するなどの工夫をしながら、学生の主体性を尊重していく指導が学生指導上の課題であると思われる。

2. 1期生(2011年度生)2年時と2期生(2012年度生)

1年時の各尺度の得点差について(入学年度別と各尺度の関連について)

次に1期生(2年生)と2期生(1年生)の各尺度の得点の比較,検討する。学年間で得点に差があったのは「キャリア探索尺度」(表6)では環境探索因子、「多次元的同一性尺度」(表7)では自己斉一性・連続性因子と対他的同一性因子、「日常生活スキル尺度」(表9)では自尊心因子で、いずれも1期生の方が2期生よりも得点が高かった。これらの因子は周囲への働きかけや、周囲と自分との関係を確立しているかといった内容を測る因子であり、こうした点での1期生の積極性が示されたと考えられる。しかしこの差は、1期生と2期生の集団の傾向としての個性をあらわす差なのか、2年生になることによって生じた学年進行による差なのかを、今回の結果だけで説明することは難しい。しかし、1期生と2期生の比較で有意差が見られた項目は、1期生の充実度別の比較では有意差が見られなかった項目であり、学年進行上の差である可能性はあるものの、先輩の存在による影響とも考えられる。

今後、同一期生についての経時的なデータの分析や、異なる期生間の同一学年時のデータの横断的分析、尺度間の差異の内容の分析などによる検討が必要である。

3. 1期生の1年時と2年時の各尺度の得点比較について

高澤・播磨(2013)における1期生の1年生時の結果では、グループ間の各因子得点の差は、多くの尺度で影響プラスのグループが他より高い得点を示した一方で、影響マイナスのグループが他のグループより高い得点を示す因子もあった(「キャリア探索尺度」の自己探索因子及び「日常生活スキル尺度」の感受性因子)。しかし、今回の結果(表1~4)では有意差が見られた因子は影響プラスのグループの得点の高さによるものとなっており、影響マイナスが他のグループより高い得点を示すものはなかった。こうした点は、充実度への影響をとらえる質が変化している可能性が示されている。特に今回の調査で有意差が見られた項目は自己探索にかかわる項目が多く見られ、2年生になって、学生生活の充実が自己の探索に影響を与えることが示唆された。

今後の課題

今回は2年生になった1期生の現状の分析と、1期生と2期生の横断的比較を行うことで1期生の特徴を検討したが、今後は、それに加えて1期生の縦断的比較によるより精緻な経時の変化を検討する必要があると考えられる。それと同時に、本研究では質問紙による量的な検討を試みたが、学生生活支援の具体的なあり方を検討する上では、面接調査等を通じて、質的な検討をすることも必要である。

引用文献

- 安達智子 (2001) 進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について—女子短大生を大砲とした検討— 心理学研究, 72 (1), pp.10-18
- 安達智子 (2008) 女子学生のキャリア意識—就業動機、キャリア探索との関連— 心理学研究, 79 (1), pp.27-34
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, pp.307-319
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, pp.211-221
- 下村英雄・堀洋道 (1994) 大学生の職業選択における情報収集行動の検討, 16, pp.209-220
- 高澤健司・播磨俊子 (2013) 新設四年制大学における学生生活の充実度とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連 (1) 福山市立大学教育学部研究紀要, 1, pp.31-35
- 谷冬彦 (2001) 青年期における同一性感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, pp.265-273
- 浦上昌則 (1996) 就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合— 教育心理学研究, 44 (4), pp.400-409

本研究は福山市立大学教員研究費 (重点) (2011, 2012年度) の助成を受けて実施された。

(2013年11月18日受稿, 2013年12月3日受理)